

坂本義和先生の思い出

竹 中 千 春
(PRIME 客員所員)

駆け出しの研究者だった頃、学問的な意味でも人としての生き方の意味でも、一番多くを学ばせていただいたのが坂本義和先生です。もともと天邪鬼で生意気な人間なのですが、もっとも尊敬し、もっとも信頼してきたのが先生でした。ご自身が行なうこと、ご自身が考えることに対して苛酷なほど厳しい先生は、後輩や学生には恐い先生として知られてきました。けれども、今振り返ってみると、私にとっては、恐いながらも、いつも優しい、思いやりに溢れた先生だったと思います。そして、人生の師を得ただけでなく、こんなにも長い時間、私を導いてくださったことに、心から深く感謝致します。

初めて24歳でインドに留学したときも親のように心配していただきましたが、30代初め、任期付きの助手をしたり、幼子を抱えながら失業したり、不安定な若手研究者だった私の身の振り方を真剣に心配してくださったのも、坂本先生です。先生に教えていただいたのがきっかけで、明治学院大学国際学部の国際政治史の教員公募に応募し、冷や汗ながらの面接も終えて、何とか採用されたという通知をもらって飛び上がって喜んだのが、まるで昨日のことのようです。就任最初の日には暴風雨だったのですが、富士山の姿が美しく見える横浜キャンパス、自由闊達な議論の飛び交う国際学部ですばらしい同僚やスタッフや学生に恵まれて16年間教鞭を執り、30代と40代、研究者と

しても教師としてもっとも重要な時期を過ごさせていただきました。先生のおかげでいただいたご縁です。ありがとうございました。

おもしろいもので、同じ大学の同じ学部で教えていても、それぞれの方は自分が大学や大学院で学んできた方法で講義やゼミを行なう傾向があります。いいかえれば、「これが講義だ」とか「これがゼミだ」という考えは、自分の直接体験に基づいている部分が大きくて、出身大学や出身学部、それから自分の先生に教えてもらった方法によっては、ずいぶん違うものになるようです。職人の丁稚奉公のようなものと言ったらわかりやすいかもしれません。師匠に教わったものと、教わらなくても体で学び、自分で見聞きし、失敗して怒られたり、成功して褒められたりしながら培った知恵と言いましょうか。そういうものが一人ぼっちで教壇に立つときになると、大切な財産になるというわけです。それが、私にとっては坂本先生の講義やゼミでした。

ということは、先生から教育や研究についての知恵をまさに丁稚のように「盗んで」、これまで何とか仕事をしていくことができました。けれども、先生と同じことをする能力はないし、時代に連れて大学も学生も変化してきています。そのため、自分なりの変更や工夫も加えながら、何とか今まで講義やゼミをこなしてきたと言えます。早いもので、最初に法政大学や千葉大学で非常勤講

師をしたときから、もう25年以上が経ちました。けれども、坂本先生のように全力投球をして授業をした、ゼミをした、という自信は未だにありません。それだけ、先生の授業やゼミは中身の濃い充実したものでした。

さて、1977-78年冬の東京大学本郷キャンパスで、法学部第3類（政治コース）3年の学生として坂本先生の国際政治の授業を受講して以来、先生との長いおつきあいの中で、教員として対等な立場に立って学生を教えたことが1度だけあります。明治学院大学国際学部の1992年度の学部ゼミで20名くらいの学生を指導したときです。テーマとテキストは、先生と相談しながらですが、私が選んだのだと思います。テーマは「現代国際政治とナショナリズム」といったもので、テキストは2冊で、ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』（白石さや・白石隆 訳、リポート、1987年）と、Hobsbawm, Eric J., *Nations and Nationalism since 1780: Programme, Myth, Reality* (Cambridge: Cambridge University Press, 1990) でした。

私としても、専任教員として初めてのゼミだった上に、坂本先生とペアを組むので、かなり緊張しながら取り組んだ記憶がありますが、先生が一緒だったので何とかなるかなと、虫の良い安心もしていました。この年には第二子を出産するために産休を取ったり、遠距離通勤をしたりしていたので、恐れ多いことに、先生に舞台裏でもいろいろ助けていただきました。今さら言っても遅いのですが、感謝の言葉もないほどありがたいことでした。すでに50代後半の教師となった今から振り返ると、第一線の研究者が出した新刊の英語文献を使って、ナショナリズム論に挑むなんて、意欲的すぎる計画でしたが、やはり若気の至りというか、新任の若い教員だったからだだと思います。幸い、ゼミ生はとても優秀でやる気のある学生ばかりで、坂本先生のご指導を受けて、一生懸命勉強

して優秀な論文を書き、皆無事に大学を巣立って行きました。

この年は、前年のソ連解体を受けて、冷戦後の時代が本格的に始まった時期にもあたります。日本では、明石康国連事務総長特別代表がカンボジアに赴任され、国連カンボジア暫定統治機構（UNTAC）を構築し、国際社会が復興支援に着手するにあたって、自衛隊を平和維持活動（PKO）部隊として派遣するののかという問題が浮上し、国内政治が揺れ動いた時期でした。当然、平和憲法や戦後日本の歴史が論じられました。おそらくはゼミが終了した後だったと思いますが、社会党が国会で牛歩戦術をとってPKO法案に反対しているというニュースについて、汗だくだくになりながら、横須賀線の中で坂本先生と話して帰路についたことを、何度も思い出します。私にとっては、ゼミの教員にいるというよりも、坂本先生のゼミに助手のように出席しているというのが内実だったのだと思います。

ただし、この時期の世界情勢は、問題は多々あっても、前に進みそうだという機運も強かったと思います。1991年初めのイラクに対する湾岸戦争は冷戦後に米軍主導の多国籍軍が行なった戦争として大きな衝撃を与え、ユーゴスラビアの内戦が拡大し始めていたときですが、米ソ核戦争の脅威がようやく遠のいて、国際平和や国連の新しい役割への期待も高まっていました。また、後から見れば1992年には日本の「バブル崩壊」が始まっていたにもかかわらず、当時はまだまだ日本経済は強いというムードが続いていました。メディアの論調も、「日本の国際化」とか「国際社会における日本の役割」とか、国際社会で日本が積極的な力を発揮したい、そういう日本にしたいという主張が主流でした。今から考えると、かなり状況の違う世界であり、かなり雰囲気異なる日本に生きていたのだと思います。

現実的には、学生たちの就職活動は順調で、大

手企業への内定もすぐに取れた年でしたし、おそらく私の受け持った学生の中では、もっとも就職の良かった年なのだと思います。そういう世の動きは、学生には直接的に現れます。ですから、アンダーソンやホブズボームを取り上げてナショナリズムを議論しても、暴力的な紛争をめぐる暗い物語だけでなく、過去の戦争の歴史を乗り越えながら、いかに国際平和をもたらすか、積極的な方法やトランスナショナルな取組みに強い関心が向けられていたと思います。まさに、明治学院大学国際学部が1980年代に設立されたときから唱えられていたミッションが、時代的な妥当性を持っていた時代に、坂本先生と教育の面でご一緒できたことは大変幸いでした。

何事にも一生懸命だった先生。授業はもちろん、教授会でも真剣でした。先生が居眠りをする姿など見たことはありません。いつも眼光鋭く目の前の問題に切り込み、何をすればよいのか、誰にとっても適切で正当な選択なのかを非常に理性的に論じられました。当時先生が好きだった言葉は、妥当かどうか、「レレバント (relevant)」という言葉でした。そして、先生の「レレバント」な選択のもととなる価値観は、いくつもの国際会議で国内外の研究者や活動家とともに追求された「平和、人権、社会正義」だったと思います。

坂本先生の最後の大きな講演は、一昨年(2013)年11月に明治学院大学白金キャンパスで開催された日本平和学会秋期研究大会でのものでした。少し前から体調を崩されかけていた先生は、一言一言、絞り出すように、しかし凜とした口調で話されました。テープ起こしされた原稿の中から、締めくくりの言葉を、若干引用させていただきます。

「あした仮に世界が滅ぶとしても、私は今日リンゴの種をまく」という言葉がありま

す。たとえあした日本が、あるいは世界が壊滅するかもしれないとしても、命の尊厳のために戦い続けるのが平和研究でなければならないと私は思います。平和とは、決して平穏な状態にするのではなくて、“いのち”を生かすための絶えざる戦いのプロセスにほかならないのだと思います。失礼いたしました。

私は、坂本先生の下で自分や自分の愛する人々の暮らす世界について真剣に考えることができ、本当に幸せでした。そして、先生を天国にお見送りした後も、言葉に表現されているものも表現されていないものも含めて、私の中には先生のまいて下さったリンゴの種が生きています。そして、あまり豊かな土壌とはいえませんが、お日様やお水や美味しい栄養を時々にいただいて、ようやく樹木となりつつあり、やがて小さな花を咲かせ、小さい実をつけるくらいにはなってきていると信じます。もうこんなに時間が経ったのに、まだまだ頼りないリンゴの木ですが、先生から託された平和の思想、命を守る非暴力的な戦いとしての平和研究を、授業やその他の活動を通して、より多くの方々へ、とくに地球の未来をつくりだしていく若い世代の方々へと手渡していきたいと思いません。

最後の「失礼いたしました」は、まったく坂本先生らしい締めくくりです。先生はまるでソクラテスのように、真理の追求を前に謙虚すぎるほど謙虚でしたが、それ以上に、カントのようにきわめて理性的で、個人的な感情を出すことはあまりお得意ではなかった、つまり、とてもシャイな方でした。図々しそうに見える私も案外シャイなので、これまで先生に真正面からお礼を申し上げたことはなかったように思います。坂本先生、本当にありがとうございます。どうぞ天国で私たちを見守っててください。